

ある朝鮮人アナキストの伝記(二)

——満州を根拠とする韓国独立運動の基本計画案——

李乙奎 著

西 京二・訳

七章 満州での独立運動計画案

こうして金宗鎮先生は天津を離れ、敵警の監視を避けながらついに入満、中東線牧丹江駅前に、族兄(注一)白治金佐鎮將軍を訪れた。そして、この事で積年の宿願を遂げられたと安堵の一息をついたのは、一九二七年十月下旬の事だった。

旅装を解く事で緊張が解け、長路の疲労で何をするでもなかったが、前途にひかえるあらゆる問題に対し(かねて考えていた全体問題だが)再びこの現地で細密な検討を加える事や、到着直後から絶え間なく訪問する客によって、寸時の暇もなかった。白治將軍とも互いに家庭の消息を知らせたり、旧知達の安否を伝える事だけで、直面する問題に対する論議もしばらくはないうまに数日を過ごした。

病を称え幾日間かを費やし、上海、漢口、北京、天津、広東等の多くの所に手紙を出すと共に、満州での運動の為の具体的な計画の熟考を急いだ。

先生の満州での運動展開の核心は、韓国独立の為の屯田養兵の計画にあった。満州に在る百万、二百万の韓僑農戸を組織訓練して武装をすすめ、民族独立の為の一大勢力を造る。しかしそれは理想的な目標にしかすぎず、現状では不可能に近い事だった。

己未前後、一九二〇年に理想であったそれが未だ理想にしか過ぎぬのは言うまでもない。己未直後、独立軍等の活動は活発であったと見なされてきた。しかしそれは、世界的な民族自決の風潮と同時に、挙族的な運動(注二)があったと言う条件のためだった。そして現在の世界は、反動的な独裁と侵略者の跋扈が高潮しているのはいずれでもない。果して屯田養兵は可能な事なのか。のみならず己未後数年の間に、在満中の運動者達が僑民達に求めた莫大な資金を、その出血的な血税を効果的に使用する事なく、派閥と個人中心の勢力争いに浪費し、それで僑胞達から信用を失くしてしまい、その上にまた赤色分子達が戦線を内部から攪乱分裂させているこの時機に、一層理想のように考えられるのは言うまでもない。

こうした事に、前途には困難な問題と隘路の重量を想定しても

(例え情熱と信念があろうと) 自己を投げうつには、誰であれ当然に計画と準備があつてこそだが、仮に、前もって準備した案があつても、それが現実に適するかを、現地で再検討すべきなのは当然で言うまでもない事だ。

筆者は、こうした先生の立案した計画案を語る前に、先生が平素から抱いていたいくつかの見解を話しておきたい。それは、その計画案を理解する助けになるだろう。

第一に、先生は正義必勝を堅く信じていた。自由平等の社会を指向することは、これは全人類の進む大行進の道で韓国独立も民族自決の原則に依り、民族自由平等の大道をゆく民族的運動であると共に全人類的な運動だ。それ故韓国独立運動は、これが民族的人類の正義の運動であるのと共に、この運動の勝利は必然的なことであつた。のみならず、こうした正義の運動に自己を捨てて、死中に生を求める信念を持つ運動者達に勝利と成功は当然なものであると考へていた。

第二に、民族独立運動と革命運動は、東西の史実によれば一時的興奮や衝動、または無計画非組織的であつて成功した例はなかつた。世紀を耐える緻密な計画と完全な組織による根気強い長期闘争の継続により成功を得るのであり、我々も長期戦を前提としなくてはならない。本来、自由と言うものは、人により与えられるものではなく、自己のものを、自身で取り戻す事であり、奪われたものを自力で再び取り戻す事だ。これが我が独立運動の本質であり、目的でもあるのだ。これと共に、長期闘争を展開する為には、人的物的条件から、また地理的な条件から、満州を根拠地にするのが最適の事なのだ。

第三は、先生の在満韓僑に対する認識だ。先生が見るには在満韓僑は、日帝と満州土着地主により搾取と迫害を受けて瀕死状態の流民達であつた。彼等は、礼儀廉恥を論ずる余地のない切迫した状態におかれていた。彼等には、一に衣食住を、二に土地を、三に協調と庇護の暖かな手をさしのべなくてはならない。彼等には指導者としての能力のある開拓の同僚が最も必要で、責任を問う前に徳で対し、負担を与える前に利益を先に与えねばならない。衣食足りて礼節を知るは万古の真理である。文字を知り、職場の全てを耕地とみなす希望が生じ、勇気が泉の如く湧れ、生は維持發展させられる。それを以て安居樂土として生活の根拠が準備されてこそ、反省が生じ、同情心が起こり、義務感責任感が出来て祖国光復の大義を、自ずから守ろうと言う事になるのだ。在満韓僑は、こうしたことがあつて初めて満洲での韓国独立運動の人的物的根拠となる事を、先生は信仰化したとも言える信念として培つていたのだつた。ために先生はこうした信念を持つ同志を求めてこそ、これまでの同志達が今迄に失逐させた独立運動者達の威信と信念が自然に回復されるであらうと信じていた。

以上の精神と信念と理解とを根拠として、先生は入満即時に左記の諸計画を立案し、そしてこの案を中心に各方面にわたつて同志達を説得獲得する事に努めたのだつた。

◇満州を根拠とする韓国独立運動の基本計画案

一、満州全域を数個区域に分割する事

満州は広漠な地域で、それを単一運動区域に組織することは、現政治的状況下では難しい。仮に可能としても効率的には組織し

得ない。それで、豆満江・鴨綠江流域の韓満国境を始めた地域的な地理的な条件と、我が韓僑達の集中居住という条件を参酌して、数個区域に区分して各地区を、交通と人口の中心地へと漸次に組織を拡大しながら、その各地区を連合組織として総団結させる事。

二、地方実情の調査把握

あらゆる計画は、必ず全ての実情を精密に調査して、科学的な準備を整えてこそ成功を得られるのだから、その調査は徹底を期せねばならない。

(カ) 僑胞の分布、生業の種別、生活実態及び生活程度・文化程度の調査(注3) 満州韓僑に対する調査の如く、不正確であ

ってはならない。日帝等の統計的調査を知る由もないが、我々自身の調査したものは不完全なものでしかない。統一された機関のない為に、原始的な数字に過ぎない。人口の調査と、そこから実態へ一歩踏み出した彼等の生業別調査、生活実態と生活程度の調査や、文化程度の調査は知られていず、抽象的な、各々を主観と臆測で測ったものでしかない。そうした非科学的で模糊とした根拠で、民族運動百年の大計を立てても無意味だ。それ故、正確に調査し運動の絶対的な先行条件となる。我が運動の土台として、そうした諸調査にまづ着手することだ。

(ナ) 独立運動団体の実況及びその実力、即ちそれらの団員数、内部組織力、武装の状況、対民衆信任度等の調査 これは、抗日独立闘争の主体勢力の調査と同時に、独立運動者にとっては自己自体の反省や、自己自身の実態把握をする事で、運動計画樹立にとって必要不可欠の事なのだ。彼を知り、己を知れば百戦百勝と

か。それにはまず己を知る事だ。

(タ) 教育機関、宗教団体・文化及び社会団体の調査 前項のナ項の調査と抗日独立闘争の主体勢力の調査から、そうした機関団体の調査は、傍系的準独立闘争組織の調査へと及ぶ。それはこれ等が擬装した闘争団体である為だ。何故ならば在満同胞達は、一部日帝の集団移民農場にある他、在満韓僑社会の風潮は抗日的な方向に傾いていて僑胞団体であれば、当時においてはその名目と目的がどうあれ、抗日的な集団とみなす事が出来たからだ。だからこそこれら教育、宗教、文化、社会のあらゆる団体を調査して実態を正確に把握する事はこれもまた、抗日勢力を結集するのに必要不可欠な要件なのだ。

(ウ) 韓僑中の中間的灰色分子の実態把握 以上のカ、ナ、タ項は、独立運動の知己的な自体把握の為のことだが、これ等は独立運動の闘争対象たる日帝勢力の浸透可能な虞犯地帯であるため、これらに対する調査もまた運動計画推進上必要な資料となるのだ。

(ロ) 赤色共産分子の調査とその分布及び部落浸透状況 赤色分子は当時あってはセクト的な傾向が濃厚で、各運動団体に分別なく友軍に仮装浸透し、組織内部から分裂を助長し、内部攪乱をねらい終局にはその組織を破壊しようとする反動分子達が多かった。これは個人的行動に属する事だが、かえって彼等の党略による運動方針と重なり、彼等の勢力の拡大の後には、その地方に多くの混乱と分裂がもたらされた。彼等の存在は従来から抗日隊列の友軍をかき乱す、我が運動線上から監視除去してしまふべき側面敵とみなすべきで、その実態調査は運動上疎忽にできない問題なのだ。

(バ) 敵警の分布状況調査——敵軍警の数と密偵の数及びその分布、名簿、その活動実態調査　これは、我が独立運動上の正面の敵に対する調査で、これこそ、彼を知る根本的な調査である。

以上で、さっと話したが先生は最初に、満州でも中国本土でも論ずる事なく、この国の主人の中国人達と緊密な関係を結ぶ事が我が運動を推進して行く上の重要な条件だと考えていた。とくに満州と一草水で国境を画す地帯ではそれは一層重要であり、官民を問わず彼等との関係を親密なものとして、抗日戦線で共同の利害関係のある唇齒相関の意識を念頭に深く入れておく事、即ち抗日闘争で韓中共同戦線を展開する事としていた。

三、僑胞組織化と指導訓練計画

前項の諸種の調査計画は、戦略上彼を知り、己を知る重要な資料となるのだが、こうした資料に依り具体的な抗日独立闘争の組織と指導訓練の計画が確立されるべきなのは勿論だ。以下の諸項により、その概要を挙げる。

(カ) 農村に経済的協同体としての農村自治組織を確立　農民達の組織化上最も重要なことは、彼等自身が必要に依って相互に団結し定着して行く事だ。こうした自発的創意的な組織がやがて強固な闘争体となってゆくので、従来の僑胞達の組織が一部識者間で結束したものだった事から大衆的なものではなく、その為長久に底力ある抵抗力を発揮できなかったこと。あるいはまた、かつての農村組織がそうであった指導者中心のもので、実生活と直結せず、それで名称がどうあれ事実は、農民自身の資意的な組織でしかなかった。その為にそれは指導者の有無にその組織の存亡がかけられるものになっていた。

それで将来の我々の在満独立運動を拡大強化しようとするれば、民衆の中に深く根を下し、住民自身達の生活の為の共同体として、彼等の経済的協力機構を組織し、更にそれを中心として隣保相助の農村自治体を確立して行く事がなくてはならない。そしてすでに集団居住している地方では勿論、分散する農民達を集団化させ、流浪する農戸は定着させて住民相互間に経済的な相互関係を結んでゆけば、ついに土着地主や土豪達の迫害に対抗し、窮乏から脱皮して経済的自立を作り得る。こうした事から生れる組織的団結は破壊されも解体されもしない強固なものとなるのだ。

このような利害相関の経済組織と同時に、生活組織によればついに住民各自の能力と創意が発揮されることで、住民達の生活訓練と改善、職業補導及び農耕営農の改善も可能なことになるのだ。こうして農民達の生活組織が確立され、在満同胞の生活が安定して、経済的な富力が増進されてこそこの組織は、ただちに我々の抗日斗争の組織となり、その増進された富力はただちに抗日斗争の財政的な後盾となるのだ。

(ナ) 在満児童及び青壮年に対する教育計画　我が独立運動者中で教育を等閑視する人はない。教育によって全国民を精神武装させることは、国の内外を問わず人々の共通した意見であり、これ程の運動長期計画者の先生としては、単にそこにとどまらない至大な課題を考えていた。そして先生は長期の遠大なる教育計画を左記のように四級教育機関として構想した。

1、小学(四年制)　在満僑胞中の農村子女の為に小学を四年制として、八才から十二才までの間、一般社会生活をする上の実践的な訓練教育を行なうと同時に、精神的に強固な国家・民族・社

会と自己個人との連帶的な關係を正常に認識させて、相互協同生活を自主的に営む習性を養う。そして、自由を求める為には身をかけて自由平等の守護者としての品性の培養と誠実な自己犠牲性と寛容協調の精神を培う。

2、中学（三年制） 中学は學課と実習を半々としながら一般的な科學教育を行い、一面に農村生活に必要な諸般の技術を実地に習得させる。全校生徒を寄宿舎に收容して相互協同の自治生活を目標とし、実習地の耕作を師生共同しその收穫を食料に當て、燃料は炭焼伐採等を共同でして充當する等、生活一切の自給自足を原則とする。そして午前あるいは午後には學課を教え、半日は実習を主として、農耕、伐採、炭焼等共同作業をし、外に、學生各自の志望に応じて農村生活に必要な技術である農具生産の簡易な鉄工、土木、建築と必要な測量、木工等の技術を必ず習得させる。そして學課と技術を研磨すると同時に、彼等が國家と社會の為に忠誠をつくそうとするような精神を日常生活を通じて訓練しながら、相互協同の労働活動の中から勇氣と堅忍の氣概を養う。この他に冬期休暇と農閑期には準軍事訓練を実施して將來の抗日救國隊列での中堅的任務を担当し得る人物を養成する事だ。

3、成人と教養講座

（カ）成人教育——成人教育は、男女三十才以下二十才以上の青年を対象として生活改善・職業輔導・國民生活の爲の常識講座等を中心とした教育内容と、一面では軍事訓練を実施する。そしてそこから將來の抗日軍を組織する計画である。

（ナ）教養講座（定期巡回講座）——全住民の啓蒙の爲に、一定の期間に部落の中心で民族獨立精神を鼓吹し、共產主義批判と世

界情勢、同時に生活改善の爲の巡回宣伝を行う講座だ。共產主義者の浸透攪乱と日帝走狗の暗躍の害毒を排する爲に、必要時急の事だ。そして貧困な生活の住民達の生活態度が、非科學的な因習の虚礼や、無計画な現状では、この生活改善の啓蒙宣伝は時急の事なのだ。

4、短期訓練班（一年間） 軍隊の編成には必ず精銳な幹部の養成が随伴する。そこで中学出身の優透な者を選び、軍事に關した短期訓練で、その任務につかせる。

四、各運動団体との統一・合作・協同及び各地域との連絡の爲の原則

合作の必要な事は、アメリカ獨立宣言の一節をひくまでもなく、我々の抗日斗争からの痛切な體驗の真理だ。

世界的な傾向の中で登場した日本帝國主義勢力と相對して闘う我が獨立運動は、民族的總力量を結集した血戦を目指さないならば、見込みのないのは歴然としていて、数多くの団体と運動者達が常々統一と團結を叫んで右往左往している。しかしその結果を見れば、どのような統一工作、合作運動も実効ある成果は挙げられぬばかりか、反對に分裂と混亂を生み出して、とどまるところがない、といった状態ではない。同じ目的を持つ人達がその目的の成就の爲に、統一團結を試みて、かえって分裂し混亂すると言ふ怪現象がひきおこされている。その原因を究明する事こそ、我が運動の發展強化の爲の、一転機を画する事だと考える。

先生は、その原因をこうした点に求めた。すなわち事実としては、獨立と言ふ共同の目標の爲に、身を捧げている事には誰も異議はない。しかし、我々の持つ封建的な支配思想と因襲的な分

派習性は、常々自己を先立てようとする個人中心の思考を持っていて、他人と協調協力するのを忌避し、反対に自己に、協力服従を要求する習性を持っていた。こうした潜在意識が、自己の小異を大同に犠牲としてつけるのを阻み、時に自己に固執する傾向を生んでいた。これが昂じると、自己が中心でないなら、例えば失敗しようとした協力出来ないと言った反動的な結果を生む事にもなっている。

そこで、大目的の為に統一と合作をしようとしても、当然問題となる主導権を誰が持つのか、幹部の椅子をいくら分配するかと云った事に関心事となり、統一合作工作の果には運動団体と個人達の、甲団体乙団体での朝緊暮散となっていた。それで、一部人士達の冷酷な批判と、同志には、我が統一団結工作は分裂工作であると言った結論を持たせる事になっていた。

こうした現実に対面して、先生は満州に於いて運動の統一と合作を図るにはどんな原則、どんな組織であたるべきかに心を傾け苦悩した。従来に、他の人達の試みたそうした権力中心の組織をもっては、先生自身が例えどんな神奇妙算を持ったとしても、前人の轍を踏むに違いないと考え、新に企図しようとした原理原則が、天津で友堂（李始榮）翁と討議した自由連合の理論であった。

先生は、各運動性に完全な自主性を認め、大目的の為に行動統一を図り、相互協調して地域対地域での協調を計画したのだった。改めて言えば、情報交換、人材の相互交流の為に団体と団体、地域と地域同士で自由連合的な組織機構を造り上げる事だ。

こうした統一合作工作の原則によって、各自団体と地域の自主性を保ちつつ、ただ闘争にとって相互の協同作戦が必要な仲に、

共同で臨時の統一戦線を結成する事で、各自が力量に応じた工作を分担する事でしかないので、主導権や幹部の配分による問題で常套の紛糾が起る理はなく、相互の必要により、情報交換、人事の交流等、要請に依る協力をする事である。協同には、支配にせよ指揮にせよ大きな問題も紛糾も起きようはずはない。こうした段階を通じ、互に理解が深まり相互の協同と協調が厚くなり、そこから単一組織化への、団結と統一の機会が促進される。こうした機会を持っても、権力の集中する支配の秩序が見られるなら再び権力闘争が起る因となる事から、強く自由連合の原理が生命であると主張したのであった。

以上が満州での韓国独立運動に対する抱負や計画でありまた、これまでの先生の人生観社会観をのぞかせるものであった。

すでに先生が来満してから半月がすぎ、十一月中旬となっていた。北満の十一月中旬と言えば嚴冬だ。時折来客が訪れる他は静かな時に、先生は白治と炉辺閑話の時局談や、満州各団体の現況と勢を語り合った。

白治將軍の話は、前年に彼が上海臨時政府國務委員に選ばれながら就かなかった前後の事情を解明する事から始まり、己未後南北滿各地に散在する数多くの独立運動の組織と団体の消長変遷の状況をたどった。現在、西間島中心の參議府と吉林の正義府及び、吉林北方ソ満国境一帯の新民府と運動線が大体の整理を見、以上の三府が群雄割拠式に鼎立して相互に猜忌と反目する醜態を止揚して、大同団結しようと、今春吉林で三府合作工作を進行させた。が、不幸にも倭敵の奸計でいわゆる吉林大檢舉で、吉林城内から

数百人の韓僑が検挙された為に三府合作工作は、その結果を見ずに中止された。しかし不幸中の幸いに、検挙された僑胞は中国朝野の好意で無事釈放された。だがその後数ヶ月後、金東三氏等の多数の中心人物が再び検挙されて、在満韓僑達の独立運動陣営は現在なお完全な整頓をしようとの途上であると語り、満州に於ける韓国独立闘争十年史をしめくくった。

肉をもえぐり出さんばかりの北風の強い夜、語り合う二人の思いは忿恨の涙をほほに縦横に走らせた。

そうした話の後に先生は、自分の起草した計画案を白治に提示説明しながら、歴戦の老将に検討を求めると、それを白治は熟考精読し快諾して、我々にも将来の長期闘争を進めるには、当然こうした具体的な計画案が必要でありながら、在満運動者のなかには未だこうしたものがなく、無用の内紛と左翼の籠絡に任かせている現状を慨嘆したものだ。

(つづく)

注1、族兄、喪に服する必要のない親族中の兄となる人。

注2、三・一独立万才運動

注3、計画案中の、カ・ナ・タ・ラ・マ・バ等は元文の音読で、日本語のアイウエオと同じく順列の表記に使われる。朝鮮語の子音の配列の順である。

×

×

×

リベロー 一号 一夏のセミナー報告集

一五〇円

土方コミュニケーション もたらそう建設 はぐまなおゆき

富士地区一般産業合同労組―その歴史と闘い 中村隆司

非暴力直接行動 小さな総括(高橋三喜子)

非暴力直接行動の訓練(WRI)他

研究センター・設立とその経過 奥沢邦成

山鹿文庫について べらぼーなぐるうば(戸駒恒世)

山鹿泰治の生涯(向井 孝)

外国のアナキストグループ 春木富三

ブルードン―その現実主義 奥沢邦成

リベロー 二号

二〇〇円

生きるわれらの村へ 弥栄郷共同体 大原みち代

フランスのアナキストたち 江口 幹

アナキズム研究センター・自己紹介

センター紹介・今年の活動

センターについて(竜 武一郎・中村隆司)

戦後アナキズム運動史年表(一九四五―四八)戸駒恒世
ドイツ労働者評議会運動の起源(一九一八―三五)上

ジョー・トマス

△附V 宋世何寄贈図書目録

取扱い 本誌編集部